

白鳥庫吉と廣池千九郎

—信仰と歴史研究における共通点—

山崎 成子

もくじ

- (一) はじめに
- (二) 白鳥庫吉の生涯
- (三) 『國史』と『皇室野史』の比較分析
- (四) おわりに

キーワード：雲照律師、信仰心、『國史』、『皇室野史』、尊皇愛国の精神

(一) はじめに

白鳥庫吉くわきち（以下白鳥）は日本における「東洋史の父」ともいえる存在で、種々学会の創設に尽力するなど、明治期の学問分野を牽引した人物である。しかし、廣池千九郎（以下廣池）の著作に精通している読者にとっては、廣池著『道德科学の論文』（以下『論文』）の序文を書いた人物としての印象が強いのではない

だろうか。白鳥は『論文』読了後、「御趣意ニハ徹頭徹尾賛成ニ御座候⁽¹⁾」との感想を廣池に寄せている。白鳥は実証的研究態度を貫いた人で、ほんの少しでも疑問点や意見の相違があれば、何時間かけても徹底的に議論していたそうである。⁽²⁾ その白鳥が廣池の意見には「徹頭徹尾」賛成を表明している。

また、白鳥は『論文』序文において、当時の道徳頹廢⁽³⁾の風潮を指摘しつつ、「イワユル聖人ノ実行セラレタルトコロノ無我慈悲ノ最高道徳ニヨルニアラズンバ、今後ノ人心ヲ維持スルコトアラワザルヤ明ラカナリ⁽³⁾」と、廣池の主張を非常に的確、簡潔に表現している。この一文によっても、白鳥が廣池の意図をよく理解していたことがわかる。

白鳥と廣池の関係を説明するべく、まず白鳥から廣池に宛てた書簡と、『廣池千九郎日記』⁽⁴⁾（以下『日記』）の記述とを比較してみた。『日記』には、廣池が白鳥を訪問したことはほとんど記されていない。⁽⁵⁾ 白鳥から廣池宛に送られた書簡によって、廣池が白鳥のもとを訪ねる際には前もって伺いをたてていたこと、都合の悪い時はその旨を報せているが、不都合のない時は白鳥からの返信はなかったらしいことがわかる。⁽⁶⁾ つまり、実際に廣池が白鳥のもとを訪ねた場合には、『日記』にも廣池千九郎宛の白鳥書簡にも、その痕跡は残らないことになるのである。総合的に判断すると、二人の間には、『日記』や残された書簡には表れていない交流があったものと思われる。

また、白鳥側の記録も探ってみた。白鳥と廣池との接点は、『白鳥庫吉全集』収録の著作目録に、モラロジー研究所創立の祝詞を書いたことが載っているのみである。その他には、家族による回想の中にも、廣池やモラロジーについての記述はなく、二人の接点はほとんど見られない。

では、なぜ廣池は白鳥に『論文』の序文を依頼したのか。白鳥の廣池に対する深い理解はどこから生まれ

たのか。白鳥の生涯を紐解きながら、二人が人として、研究者として、信頼を深めた中核を探っていききたい。

(二) 白鳥庫吉の生涯

一、生い立ち

白鳥庫吉は慶応元年（一八六五）二月四日、現千葉県茂原市長谷に農業白鳥嘉一郎^{かいちろう}、母徳の二男として生まれた。嘉一郎はもともと開化的な思想の持主だったらしく、時々東京に出ては文明開化の息吹を感じ、これからの世の中は学問をやらなければダメだというのが口癖だったそうだ。その嘉一郎には先妻との間に斧藏・花子の二子があったが、庫吉はこの異母兄の斧藏と折り合わず、「常に精神的圧迫を受けた」⁽⁷⁾そうである。嘉一郎は、そんな庫吉を不憫に思い、寺子屋の僧の勧めもあって浜野の漁夫の家に下宿させ、曾我町（現千葉県千葉市中央区）の小学校に通わせた。

小学校時代の庫吉は腕白坊主で、さほど勉強熱心ではなかったようだが、級友に刺激されて中学受験を思い立ち勉強を始めた。そして友を追いかけるように千葉中学（現千葉県立千葉高等学校・千葉市中央区）に入学し、良い師（那珂通世^{なかにちよ}・三宅米吉^{みやけよきち}ら）に出会い学問の道に進んだようである。後年、孫に「俺は十四歳（中学進学時の年齢）で目が覚めた、お前はまだかな」と語っているように、これらの出会いが転機だった。

その後、白鳥入学の年に東京帝国大学に新設された史学科に入り、帝大史学科第一期の卒業生として学習院・歴史科教授に迎えられる。明治三十七年（一九〇四）には東大教授も兼任することとなり、庫吉四九歳の

時、大正三年（一九一四）、東宮御学問所御用掛、教務主任を拝命する。以来七年間、一日も欠かすことなく重責を果たした。優秀で人望のあった庫吉は、多くの学会や委員会の理事を務めながらも、権威や富には関心がなく、自身の研究を生きがいとして人生を送り、昭和十七年（一九四二）三月三〇日、風邪から肺炎を併発し亡くなった。十日後には栄誉をたたえ旭日重光章を授与されている。

二、学者として

白鳥は日本で初めて東洋史という一分野を確立し、一七九篇の単行書及び論文を著している。その他にも各地で多くの講演を行い、その筆耕原稿も一二三篇残されている。⁽⁹⁾この数多く残された著作から、学者としての白鳥に迫ってみたい。

①時事問題

膨大な白鳥の著作を年代順に追っていくと、単に東洋の古い歴史を学んでいるわけではなく、時事問題に則して過去の歴史を研究していることがわかる。

例えば、日露戦争前後には朝鮮や満州地方の研究に力を注ぎ、日露戦争後（一九〇五年）には「戦捷に誇るなかれ」との講演を行っている。かつて日本は朝鮮半島に出兵し敗退した事実を引き、日清・日露の勝利に油断しては、たとえ神国の日本であっても敗れることはある。過去の歴史から学ぶべきであること⁽¹⁰⁾を説いている。

また、韓国併合前後には「韓国の国是」と題する論文を著したり、南満州鉄道株式会社社長の後藤新平を

説得して、東京支社に満鮮歴史調査部を設立させている。大陸に進出するならば、その地理、歴史、及びその地に住む人々の民族性を知る必要があると考えていたからである。

時事問題を扱った論文が多いのは、学問を世のため人のために使うべきだと考えていた、白鳥らしい問題意識の表れである。また、この研究態度は、世界人類の幸福のためにモラロジー（道徳科学）の研究をした廣池と共通している。

②日本古代史の研究

白鳥は、日本人が日本建国の由来を知りたいと思うのは、家の祖先について知りたくなるのと同様に当然の感情であり、また義務でもあると考え、積極的に日本古代史の研究にも取り組んでいる。その結果、皇祖の仁慈によって国民に幸福がもたらされたと考え、「天皇の御徳は玉であつて、円満仁慈の表象である」という結論に達した。白鳥が皇室を敬慕する心は並々ならぬものがあつたようで、家族に対しても一般庶民が皇室のことを軽々に話題にすることは戒めていた⁽¹²⁾という。その白鳥が神代について研究し、その成果を発表したのは強い信念があつたからだ。単に敬遠するだけが皇室への忠ではないことを熱く語っている。学者として真に皇室に忠を尽くすとはどういうことかを、身をもって示している。以下に参考として白鳥の情熱が最もよく表れていると思われる一文を引用する。

（神典の意味の）真相を究めず⁽¹³⁾に敬遠しすぎてばかり居るのが、果して日本国民として忠なる所以でありませうか。……神典を研究しないで日本国民の祀つて居る神社の本原も知られる道理がない、……

敬遠は決して国家に忠なるものではないませぬ。……その事の至難だとか、世間の区々たる非難などを恐れて躊躇するが如きは誠につまらぬ姑息な考えだと思ひます⁽¹³⁾。

また、歴史研究における態度としては「公明正大に、そのままの解釈が下したいものです。敢へて自分の新しい思想を開陳しようとするのではありませぬ⁽¹⁴⁾。」と述べているように、あくまでも原典に込められた意味、すなわち古代日本人が神典に込めた想いを明らかにしようとしたのである。アメリカ人日本史学者のピーター・ウェツラー(Peter Wetzel)教授は、白鳥の神典に対する研究態度を以下のように批判しているが、これは誤解だといえよう。

中国と日本の伝統のあつかい方に重大な不一致がある。儒教については、誤謬をあげているが、日本の国家創生に対しては同じ批判的手法を使っていない。……白鳥は、皇室の祖先は天照大神であり、それはこれら両文献によって裏付けられている、と述べる。……だが、『古事記』『日本書紀』はこのような解釈を裏付けてはいない。これは、白鳥が外国文化を批判的に評価せよといいながら、日本伝統については無批判であったことを示す一例である。外国の文物をみる場合には識別せよといい、日本の歴史と伝統をみるとときには、自説に有利な証拠ばかりを求めた⁽¹⁵⁾。

白鳥が儒教の誤謬を暴いたという論文は、「尚書の高等批判⁽¹⁶⁾」を指していると思われる。白鳥はこの論文で、堯・舜・禹の三帝は実在の人物ではなく、儒教成立後の陰陽思想による徳を示したものであると述べて

いるのだが、この解釈の仕方は記紀の解釈と通じるものである。白鳥は「神典はあくまでも神話であり、登場する神は歴史上の人物ではない」ということを常に主張している。つまり三帝と同じ扱いである。しかし神典が歴史事実ではないとしても、皇祖の精神、古来日本人が皇室に対して抱いてきた思想が書き表されたものであるから、その精神を天照大神に擬人化して認めているというのである。⁽¹⁷⁾ ウェッツラー氏のいうような偏った研究者ではないのである。あくまでも公平無私な実証的研究態度を貫いている。人目を引くような新説を打ち立てるとか、ある特殊なイデオロギーのために歴史資料を利用するのではなく、遺された資料から帰納的にその精神を汲み取る作業を続けたのが白鳥であった。このような研究態度は廣池と通じるものがあるのではないだろうか。

三、信仰心

白鳥は慈愛に充ち、公平無私な人であったようだ。その心はどのようなようにして育まれたのか。その心を育てた要因の一つは、信仰心にあるかもしれない。白鳥が非常に篤い信仰心を持っていたことは、娘・君子、孫・芳郎の回想などから窺える。

……昭和十四年に私（著者注・孫・芳郎）がカトリックに改宗することを相談しにゆくと、信仰を持つことは大変よいことだと喜んでくれたのである。⁽¹⁸⁾

……孫美千代の手によって、額に水をそそがれて洗礼を受けた。このことは誰も知ってはいないことで

ある。父が宗教に対する考え方は、高い山をどの道から登つても頂は一所と云う考えであった。私（著者注・娘・君子）が学校でカトリックの教理を学ぶようになって、洗礼のことは皇室に関係のある父に気がねしていたのだが、父は命の終りに近く、孫たちの愛によって、愛するが故に、愛する者たちと共に、永遠の幸福を希つたのであろうか。⁽¹⁹⁾

白鳥晩年の様子からは、信仰によって安心が得られ、人として目指すべきものの答えが与えられると考えていたことがわかる。宗教や信仰に対する考え方は、廣池と考える方が近いばかりでなく、表現の仕方も非常によく似ている。廣池は『道徳科学の論文』において「神」を以下のように説明している。

山の頂上は一つですが登り道は多々あるがごとくであります。すなわち神（本体）はただ一つなれど、これを信仰の対象とする宗教はその種類千差万別であります。⁽²⁰⁾

白鳥、廣池ともに、様々な宗教、宗派を認め、神を求める信仰心を登山に喩えている。また、白鳥は『論文』序文において、廣池の人格の一端として、深い道徳的、宗教的体験を持った人物として紹介している。このことから、白鳥が宗教を道徳的に欠くべからざるものと捉えていたことが窺える。

四、雲照律師^{うんしょうりつし}

白鳥と廣池とともに雲照律師のもとで修養した経験を持っている。廣池が雲照律師のもとに通った時期は

明治二十九年（一八九六）頃だと推定されているが、白鳥が雲照律師のもとに通った時期ははっきりしない。白鳥と雲照律師との関係を示すものを以下に示し、白鳥が雲照律師のもとにいつ頃通っていたのかを考察してみたい。

白鳥の弟子である津田左右吉は、明治二〇年代終わり頃から三〇年代の初め頃の白鳥の様子について以下のように述べている。

二三の同志と共に雲照律師について仏典の講義を聴かれたのも、この間のことであった……⁽²¹⁾

しかし、白鳥の孫、芳郎は次のように述べている。

祖父は、若い頃、癩癩かんやぐがおさまらないので、修養するため、目白不動の僧侶であった雲照律師の下に赴き、親しく仏法を学び、専ら気分を平静に保つよう努力したという。以来雲照律師から譲り受けたという木魚を座右に置き癩癩かんやぐが起るたびにこれを叩いて精神修養に励み、このような修行は二六歳で結婚するまで続けられたという。⁽²²⁾

また、娘、君子はさらに次のように述べている。

父母が再婚したのは、父が三十歳母が二十歳の時であったが、実は父には再婚であった。……父は先妻

を亡くして後、自分もルイレキを手術して体も大分弱ったようである。そして一時は関口のある寺にこもり木魚をたたきながらひたすら修業をしたそうであるが、生涯とりみだして怒ることなど見せなかった父は無言のうちに威のおそれを感じさせる人であった。⁽²⁴⁾

白鳥と雲照律師との関係を示す公的な記録としては、雲照律師が在家信者のために立ち上げた道德的宗教的教会である十善会じゅうぜんかい会員記録がある。明治二四年（一八九一）、当時の記録に、井上馨かおる、山県有朋ありともとともに、白鳥の名も残されている。⁽²⁵⁾

白鳥が再婚した年は、数え年で三十歳、明治二七年（一八九四）のことである。芳郎氏の言う二十六歳で結婚するまでというのは、修行は先妻を亡くした後のようなので、一度目の結婚ということも考えられず、何かの勘違いだろう。総合的に判断すると、十善会の記録から明治二四年（一八九一）には既に雲照律師のもとに通っており、白鳥が再婚した明治二七年（一八九四）までは修行を続けたと考えられる。白鳥と廣池が出会ったのは、『論文』の白鳥序文が書かれたと考えられる大正一五年（一九二六）の三十年前、明治二九年（一八九六）頃であるので、二人が雲照律師の下で出会ったと仮定して調べてみたが、今回はその証拠はつかめなかった。

しかし白鳥は、十善会の事務を取り仕切っていた澤柳政太郎まさたろうとは帝大の寮で起居を共にした仲であり、さらに明治二六年（一八九三）から明治二九年（一八九六）まで、澤柳の実弟を彼の外遊中預かって世話をしている。⁽²⁶⁾直接雲照律師を訪ねる機会は減ったかもしれないが、雲照律師との関係が途切れたとも考え難い。白鳥、廣池と雲照律師の関係は今後の課題としたい。

(二) 『國史』と『皇室野史』との比較分析

『國史』は、白鳥が昭和天皇の東宮時代、東宮御学問所とうきゆうおがくもんじょで日本歴史の講義をするためだけに書き下ろした教科書である。そこには若い皇太子に、歴史的事実から天皇のなんたるかを学んで欲しい、という願いが込められているはずだ。つまり、『國史』の内容を理解することは、白鳥の理想とする天皇観、国家観を理解することでもある。

また、白鳥が『國史』を著したと思われる大正年間たいしょうねんかんは、白鳥と廣池の交流が活発化した時期でもある。大正二年（一九一三）三月に、白鳥が滿鉄調査部主任に廣池を推薦したいがどうか、という書簡を出したこと(27)から二人の旧交が復活したようである。白鳥が御学問所で歴史の講義を担当し始める頃、モラロジー研究に着手した廣池との交流が活発になったのである。この時期に書かれた『國史』は二人の関係も明らかにしてくれるかもしれない。

一、『國史』の特徴

人は訴えたいことを繰返し述べるものである。『國史』の中で最も多く見られた言葉は、天皇の大御心に関するものであった。関係する言葉が何度本文中に出てくるのかを数えてみた。

- ・ 民を愛撫あいぶする、国民の安寧あんねい・平和・慶福を祈る、民の父母など、皇祖の赤子である国民の幸福を願う言葉……四七回
- ・ 天皇の仁慈、民のために尽くす、質素儉約など、天皇自身の経済的豊かさよりも、国民の生活状況向上

を願う言葉……二八回

・建国の精神・大御心など、皇祖以来の国民の幸福を願う心そのものを表した言葉……一一回

これらの言葉が示している本質は同じであり、白鳥が東宮（後の昭和天皇）に最も伝えたかったことであろう。天皇は古来より「万民を愛撫してその協力に信頼」して国を統治してこられ、この御精神が日本の平和と繁栄、ひいては世界人類に平安をもたらすことを伝えたかったのだろう。

また、学問・芸術・殖産興業については、時代毎に章を設けて、歴代天皇が渡来人を保護し、大陸の新知識を積極的に移入し国民に伝授したことを説いている。渡来人はその恩恵に深く感謝して日本に帰化し、新知識・技術は定着していった。また、学問の要は身を修めることであると、歴代天皇の言葉を借りてくり返し説いている。

現在の皇族方が、それぞれ専門分野での研究を続けていらっしやることだけを見ても、白鳥がこれらの歴史を通じて伝えられた天皇としての資質は、しっかりと受け継がれていることがわかる。

二、廣池との関係が窺えるもの

『國史』の記述には、廣池の著作である『皇室野史』と類似する個所がいくつかある。以下に類似する個所を引用し、比較検討したい。（引用文中の傍点は筆者による加筆）

①後柏原天皇即位の礼について

『國史』の記述、

されば後土御門天皇崩ぜし時大葬の費なく、幕府は諸大名に之を課せしも貢納遲滞して空しく時日を経過せりといふ。また後柏原天皇踐祚し給ひしも、幕府の命を奉じて資を献ずる大名極めて少かりしを以て即位の典を挙ぐる能はず、二十二年の後幕府の献金によりて纔に其の儀を行ふを得たり。⁽²⁸⁾

『皇室野史』の記述、

……後土御門天皇遂に其志を遂げ玉はずして、明應九年九月土御門内裏の黒戸の御所にて崩し玉ふの運となれり、而して其崩御の御時や更に哀れ憊なき御有様にぞありける、

明應九年、庚辰、天皇、崩レ於^ニ土御門内裏黒戸、春秋五十九、時公武共衰廢、且自^ニ去年、玉體不豫、無^ニ讓位之儀、冬十月親王勝仁自^ニ北對^ニ移^ニ小御所、受^ニ劍璽^ニ踐祚、大行皇帝、靈柩猶在^ニ黒戸、依^レ少^ニ資用、而不^レ能^レ行^ニ葬禮、十一月に至りて泉涌寺に葬る、

即ち後土御門天皇崩し後柏原天皇翌月を以て即位し玉ふ、……今や幕府其資用を四方に徴せども集まらざる故を以て之、(著者注…即位の礼)を行ふ事能はず、……遷延二十二年に及び、永正十六年十月内大臣三條西實隆幕府を説諭して其料を上らしめ、……始めて大礼を行ふ事を得たり……(出典…官位訓、口碑)⁽²⁹⁾

後土御門天皇の時代にはすでに朝廷財政は逼迫しており、後土御門天皇崩御の後、後柏原天皇が即位される際、即位の礼も挙げる事が出来なかったこと、即位後二十二年が経過してやっと、幕府からの献金によ

って即位の礼を挙げる事が出来たことが共通して記されている。

二書の記述はよく似ているが、『皇室野史』における記述のうち、官位訓の引用と思われる一段下がった記述との相似は見られない。ところが、口碑部分のまとめと考えられる本文の記述との相似が見られる。

②後奈良天皇即位の礼

『國史』の記述、

後奈良天皇即位の礼もまた遅延せしかば、公卿等は地方の大名に勸説して其の資を献せしめしに、大内義隆、主として之に応じければ、之によりて宮殿を修め、調度を整へ、踐祚の後、十一年にして始めて大典を挙ぐるを得たり。³⁰⁾

『皇室野史』の記述、

……即位の大礼（著者注…後奈良天皇即位の礼）の如き亦挙行するを得ず、朝臣東西に出て大内今川北條朝倉等の諸侯に説き、銀数十萬匹を得て即位より、凡十有二年を踰へ、天文五年始めて大礼を挙ぐるを得たり……（本文中、出典…口碑）³¹⁾

後奈良天皇の即位の礼も、後柏原天皇に続いて財政難により即位後十一年が経過するまで挙行することが

出来なかった。『國史』では踐祚の後十一年となっており、『皇室野史』では踐祚後十有二年となっているが、後柏原天皇が崩御された大永六年（一五二六）から、後奈良天皇が即位された天文五年（一五三六）までは数えて十一年であるので、『皇室野史』の十有二年は誤りであろう。

③大内義隆について

『國史』の記述、

……大内義隆が、錢一萬匹を獻じて太宰大弑を得んことを請ひしに、天皇は官爵は金錢によりて与ふべきにあらずと宣たまひて之を斥け給へり。皇室式微の極に至りて、なほよく其の尊嚴を維持するを得たりしは此に職由せずんばならず。³²⁾

『皇室野史』の記述、

大内義隆は……常に皇室に近かん事を欲し、天文五年皇居の日華門倒る、や其建造費を獻す、蓋其意は太宰大弑たらんとするにありと、然れども天皇遂に之を任せさりき、……（本文中、出典…不明）

大内義隆は後奈良天皇への献金と引き換えに、太宰大弑の職を得ようと画策したが、天皇はそれを許さなかったと『國史』、『皇室野史』ともに記されている。しかし、同じく『皇室野史』には、以下のような異説

も収録されている。

天文五年二月義隆奏請して後柏原天皇即位の料を献ず、五月詔して太宰大式に補せられ昇殿を許され、十年従三位に叙せられ、十四年正三位十七年遂に従二位に叙せられたりと、……（引用文中…野史）⁽³⁴⁾

大内の献金に対して、太宰大式の職を与え、さらにその後にも売位が行われたことが記されている。『國史』ではこの説を採用せず、売官売位を許さない天皇の姿勢が皇室の尊嚴を保ち得た所以だとしている。この相異は、『國史』が皇太子の歴史教科書としての性格を持つているからであろう。教育者白鳥の歴史観が表れているところでもある。

④ 後柏原天皇時代の惨状について

『國史』の記述、

是より後朝廷の窮乏は、益々甚しく、宮垣壞れて、三条橋上より、内侍所の燈火を觀るを得たり、と伝へらる。⁽³⁵⁾

『皇室野史』の記述、

……紫宸殿の御築地やふれて、三條の橋のほとりより、内侍所の御あかしの光見えしとかや……（引用文中、出典…白石紳書）

後柏原天皇時代の窮乏を表した記述であるが、両書ともに御所の御築地が壊れて、京都三条橋から御所内の内侍所の明かりまで見えていたことを伝えている。

⑤毛利元就の献金について

『國史』の記述、

（正親町天皇の世）毛利元就の献金によりて、纔に即位の典を挙ぐるを得たりき。⁽³⁷⁾

『皇室野史』の記述、

……翌月正親町天皇踐祚せしが、……即位の料足なき事亦前朝の時と異ならず、是を以て頻りに西国諸侯に其献納を勧めたれとも俄に之を上るものなかりしが、永祿三年（中略）正月毛利元就金穀を献するに因て始めて挙行するを得たり（本文中、出典…野史・國史眼・御湯殿日記）⁽³⁸⁾

正親町天皇の時代もまた即位の礼が挙げられず、毛利元就の献金によってなんとかこれを挙行できたこと

が記されている。

以上、『國史』と『皇室野史』に共通する箇所を比較した結果、『國史』が歴史教科書としての性格を持ち、『皇室野史』は学術書としての性格を持つていることから、相異点も見られるが、参照した箇所は非常によく似た内容であることがわかった。

廣池は『皇室野史』発売にあたって、応仁乱後の皇室の大惨状を知る者は、当時は天下に一人もなく、新資料を参照した画期的な歴史書であると宣伝している。³⁹ 残念ながら白鳥の『國史』執筆時の状況がわかる資料に当たれなかったため、白鳥が参照した文献を特定することはできなかった。白鳥が『皇室野史』を参照したのか、廣池に相談したことがあったのかはわからない。しかし、全体を通じて皇室の仁慈によって日本は発展してきたという歴史叙述は、白鳥と廣池の共通する歴史認識を示している。

(四) おわりに

白鳥は廣池より一歳上で、亡くなったのも廣池の没後四年、ほぼ同時代を生きている。また、二人ともあまり裕福とはいえない農家の出身であり、教員としての経験を持ち、歴史学を学んでいる。白鳥も若い時分は体調を崩して大学予備門を休学した時期もあった。また、共通して雲照律師のもとでほぼ同時期に仏典について学んでいる。二人の境遇や経歴はかなり共通した部分が多いことがわかる。

研究者としての交流は大正年間以前から、廣池が著書を白鳥に贈呈したり、『東洋法制史』を著す際に白鳥に参考文献を紹介してもらったことがわかって⁴⁰いる。廣池は研究者として白鳥を尊敬し、相談していたよ

うである。モラロジー研究に取り組んだ廣池が、その構想段階から白鳥に相談していても不思議ではない。もともと信仰心が篤く、皇室を敬慕する白鳥であるから、お互いに感化を与え合うこともあっただろう。廣池の考える皇室の慈悲寛大の精神を、白鳥も「仁慈の精神」として認識しており、その精神が世界に幸福をもたらすとしている点が一致している。

廣池の尊皇愛国の精神は中津にいた頃から一貫しているが、雲照律師の影響も少なからずあるだろう。白鳥も同様に雲照律師の影響を受けて尊皇愛国の精神を育み、東宮御学問所で忠勤に励み、古代史研究を通じて皇室の仁慈の念による国民への恩恵を説いている。

二人は頻繁に交流していたわけではないが、これら共通した経歴や、心の底で通じ合う尊皇愛国の精神が二人の心を近づけ、廣池の白鳥に対する大きな信頼を育てたのだろう。

注

(1) 白鳥庫吉書簡、大正一五年(一九二六)一〇月一六日
付、廣池千九郎宛、廣池千九郎記念館蔵

(2) 本文中のエピソードは、特にことわりのない限り、以下の文献を参照した。

白鳥清「白鳥庫吉」『父の書齋』三省堂、一九四三・石井幹之助「白鳥庫吉先生小伝」『白鳥庫吉全集』第十卷、岩

波書店、一九七一・吉川幸次郎編「白鳥庫吉」『東洋学の創始者たち』講談社、一九七六・白鳥芳郎『日本民俗文化

大系九 白鳥庫吉』講談社、一九七八

(3) 廣池千九郎『新版 道徳科学の論文』一冊目、廣池学園出版部、一九八五、七六ページ

(4) 廣池千九郎『廣池千九郎日記』一―五、(学)廣池学園出版部、一九八七

(5) 年表参照

(6) 白鳥書簡「十二日御召被下候処、前回御発送の御書面遅れて到着仕候為め大ニ失礼致候、又明十四日朝御光来の

- 事今日葉書にて相承候処、生憎当日午前八時より大学の授業有之候間、御都合よろしくば、明後十五日の午前八時頃御枉駕被下ば好都合に御座候。」大正一〇年（一九二一）六月一三日付、廣池千九郎宛、廣池千九郎記念館蔵
- (7) 白鳥芳郎「祖父白鳥庫吉との対話」『白鳥庫吉全集 月報十』岩波書店、一九七二、七ページ
- (8) 同書、同ページ
- (9) 白鳥庫吉全集編集部「白鳥庫吉著作目録」『白鳥庫吉全集』第十卷、岩波書店、一九七一
- (10) 白鳥庫吉全集編集部「戦捷に誇るなかれ」『白鳥庫吉全集』第十卷、岩波書店、一九七一
- (11) 白鳥庫吉「大嘗祭の根本義」『白鳥庫吉全集』第十卷、岩波書店、一九七一、二五九ページ
- (12) 白鳥君子「父のおもいで」(一)『白鳥庫吉全集 月報六』岩波書店、一九七〇、六ページ
- (13) 白鳥庫吉「大嘗祭の根本義」、二五〇ページ、(引用文中の傍点は筆者による加筆)
- (14) 同書、同ページ
- (15) ピーター・ウェッツラー著・森山尚美訳『昭和天皇と戦争』原書房、二〇〇二、一六五ページ、(引用文中の傍点は筆者による加筆)
- (16) 白鳥庫吉「尚書の高等批判」『白鳥庫吉全集』第八卷、岩波書店、一九七一
- (17) 白鳥庫吉「神代史の新研究」『白鳥庫吉全集』第一卷、岩波書店、一九六九
- (18) 白鳥芳郎「祖父白鳥庫吉との対話」『白鳥庫吉全集 月報十』岩波書店、一九七一、八ページ、(引用文中の傍点は筆者による加筆)
- (19) 白鳥君子「父のおもいで」(二)『白鳥庫吉全集 月報七』岩波書店、一九七〇、七―八ページ、(引用文中の傍点は筆者による加筆)
- (20) 廣池千九郎『新版 道徳科学の論文』七冊目、廣池学園出版部、一九八五、二二五―二二六ページ
- (21) 津田左右吉、前掲書、三五二ページ
- (22) 白鳥芳郎「祖父白鳥庫吉との対話」、八ページ、(引用文中の傍点は筆者による加筆)
- (23) 当時、雲照律師は関口の新長谷寺に目白僧園を開設していた。
- (24) 白鳥君子「父のおもいで」(一)、四ページ、(引用文中の傍点は筆者による加筆)
- (25) 草摺全宜『釈雲照 上編』東洋書院、一九七八、一二三―一二四ページ
- (26) 新田義之『澤柳政太郎 ― 随時随所楽シマザルナシ ―』ミネルヴァ書房、二〇〇六
- (27) 年表参照
- (28) 白鳥庫吉『昭和天皇の歴史教科書 日本歴史(下)』

- 勉誠社、二〇〇〇、一〇九―一〇一〇ページ
- (29) 廣池千九郎『皇室野史』、『廣池博士全集一』、廣池学園事業部、一九三七、三四五―三四六ページ
- (30) 白鳥庫吉『昭和天皇の歴史教科書 日本歴史(下)』一〇〇ページ
- (31) 廣池千九郎『皇室野史』、『廣池博士全集一』三四八―一〇〇ページ
- (32) 白鳥庫吉『昭和天皇の歴史教科書 日本歴史(下)』一一一―一〇〇ページ
- (33) 廣池千九郎『皇室野史』、『廣池博士全集一』三四九―一〇〇ページ
- (34) 同書、同ページ
- (35) 白鳥庫吉『昭和天皇の歴史教科書 日本歴史(下)』一一〇―一一一―一〇〇ページ
- (36) 廣池千九郎『皇室野史』、『廣池博士全集一』三四七―三四八ページ
- (37) 白鳥庫吉『昭和天皇の歴史教科書 日本歴史(下)』一二五―一〇〇ページ
- (38) 廣池千九郎『皇室野史』、『廣池博士全集一』三五〇―三五二―一〇〇ページ
- (39) 廣池千九郎編『史学普及雑誌』第九号、史学普及雑誌社、一八九三、二―一〇―一〇〇ページ
- (40) 年表参照

*この原稿はもとモラロジ―専攻塾の研修の一環である「人物研究」としてまとめたものです。モラロジ―専攻塾の講師である、花井等先生、松浦勝次郎先生、井出元先生、宗中正先生そして加島亮伸教務室長には、起草段階から資料収集などご指導いただきました。また、道徳科学研究センターの立木教夫教授、橋本富太郎研究員には、本誌への掲載を強く勧めていただき、本稿をまとめなおす際には、細部にわたりご指導いただきました。あらためてお礼申し上げます。

大正						
	五	四	二	翌	四	四
	一九六	一九五	一九三	一九二	一九〇	一九七
	『國史』執筆	東宮御学問所御用掛、教務主任を 拜命		学習院事務取扱となる	満鉄東京支社に満鮮歴史地理調査 部の設置を後藤新平に請い、設立	満鮮を遊歴
		天理教の公職を退道徳科学の研究 に着手	神宮皇學館教授を辞職、天理中学 校長に就任	大正元年の大患、法学博士の学位 取得	天理教に入信	神宮皇學館教授となる
	七・五 白鳥らに……宮内のもようき くこと(日記)		三・六 廣池を満鉄調査部の主任に推 薦・就任の意思確認(白鳥書簡) 四・七 廣池の博士号取得の祝宴に招 待されるが、所用で欠席の詫び状 (白鳥書簡)			二・八 『てにをはの研究』贈呈に対す る礼状(白鳥書簡) 七・〇 蒙古氏族の法律に関する参考 文献紹介依頼に対する返事(白鳥書 簡)

昭和				
三	一五	二	三	七
一九六	一九六	一九三	一九三	一九八
	定年により帝国大学教授を退官	学習院教授を退任	鎖 皇太子殿下渡欧、東宮御学問所閉	
三・ 行	『道德科学の論文』初版発 行	八・七 『道德科学の論文』完成、 モラロジー研究所創立		
三・九 熱海に招待された御礼（白鳥書簡） 三・七 白鳥・新渡戸を東京会館・精養軒に招待（日記）、序文執筆の御礼か？	三・九 熱海に招待された御礼（白鳥書簡） 三・七 白鳥・新渡戸を東京会館・精養軒に招待（日記）、序文執筆の御礼か？	二・二六 『論文』第一章贈呈（白鳥書簡）この前後に序文依頼か？ 二・二五 廣池が長野から名産品を送付したことへの御礼（白鳥書簡）	七・二四 御皇室に最高道德を入れたい旨、白鳥に相談（日記） 六・三 廣池が白鳥に対して訪問伺いした返信（白鳥書簡）	六・九 白鳥を訪問、嘉納治五郎との面会仲介を依頼（日記） 六・五 嘉納との面会依頼について返答（白鳥書簡） 六・六 嘉納との面会后、道德科学に無理解だったと報告（廣池書簡・未投函）

一八 一九四	三 一九六	二〇 一九五	
四・九 旭日重光章を授与される	三・三〇 没		
	六・四 没	四・ 道徳科学専攻塾を開塾	
			三・五 精養軒招待の礼状（白鳥書簡） 三・三 白鳥に『論文』を贈呈（日記） 三・三 『論文』完成のお祝い状（白鳥書簡） 「モラロチー専攻塾開塾式の祝詞」（白鳥）

*（白鳥書簡）…白鳥が廣池に宛てた書簡
（廣池書簡）…廣池が白鳥に宛てた書簡
（日記）…『廣池千九郎日記』